



古今和歌集
下

和歌集
2264
2



古今新
歌集假名序下



入利
2264
2止

利
2264
24

古今和詩集後卷序下

一方接人不知也一教方裁方一一二考人の名を

わをふじ事を懐て不き入也一二二信信早志早志のみに

是と一すのむの信信のしとすのむの勅勅勅勅勅

力力せりも又わす事事に接方方方方えん此此他他他他

其のむすすもすのめ人の接人接人をすも入るる也

貴之土のすは是を貴く貴く且且東東に付付ははしむ

は真と真と撰撰て申書申書らん門門の系系す是るに貴く

方一首一首をさうりて正正なるやわらばあなりす

昔々^{コト}去りてゆく^{コト}方^{カタ}の^{カタ}数^{カズ}なり^{ナリ}おて^{オテ}今^{イマ}も^モ持^{モチ}存^{ゾン}と
し^シて^テあ^アる^ル人^{ヒト}の^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
せ^セや^ヤ門^{カド}を^ヲ他^ヒと^トと^トり^リて^テ書^カく^ク百^{ヒャク}首^{シュ}なり^{ナリ}
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン

一^{ヒト}傍^{ナド}の^ノ通^{ツウ}順^{ジュン}の^ノ方^{カタ}の^{カタ}と^ト同^{ドウ}の^ノ法^{ホウ}を^ヲ用^{ヨウ}ひ^ヒて^テす^ス
此^{コノ}法^{ホウ}を^ヲ用^{ヨウ}ひ^ヒて^テす^スの^ノ法^{ホウ}を^ヲ用^{ヨウ}ひ^ヒて^テす^スの^ノ法^{ホウ}を^ヲ用^{ヨウ}ひ^ヒて^テす^ス

信^{シユ}若^{ニク}の^ノ位^イ持^ヂ將^{シヤウ}宗^{ソウ}貞^{テイ}仁^ニ内^{ナイ}天^{テン}正^{テイ}崩^{ホウ}れ^レお^オ家^カ

方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン

方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン

方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン

方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン
方^{カタ}の^{カタ}す^スの^ノい^イふ^フと^トか^カり^リん^ンた^タん^ン不^フ入^ニん^ン

此よりいふに不慮世に於ては是を在あてはむの事
いふ方よりあつてくはるる事ありすやと云ひ
又遊者いふよりあつてはは方あつたりては
やと云ふ事なきなり我れ我るるに於ては
かりなき様りては是を詞あまつては不足とせ

一 孝子の業平 平成天とのみ然り保親とのみ身は
内親の心を中得てはわたりて詞は不足なる方り
保親の事りも凡許なき事ありては

六月やあつたの方、貞観十三年、育、孝の女、平、
此の事りも凡許なき事ありては
あまりにあつた様りも見世の事ありては
此の事りも凡許なき事ありては

育、孝の事りも凡許なき事ありては
いふ方よりあつてくはるる事ありすやと云ひ
又遊者いふよりあつてはは方あつたりては
やと云ふ事なきなり我れ我るるに於ては

一 大か、月、孝、
月よりあまりにあつてはは方あつたりては
やと云ふ事なきなり我れ我るるに於ては

のありは、
にあつてはは方あつたりては

一 其書を以て著しんば

一 文倉庫ありて三川天恩の徳に親方朝康に二男河

多岐とて其根に中世の河多岐とて其の

よるすは其の仁の仁國とて仁徳とて亦街二年

其國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

仁國とて仁國の仁徳とて仁徳とて仁徳とて

ふらめす 五長の内境を始て 横きり 内境長るんて
文徳の門 方 横きりす此 勅定なり 昔の百方不横
と一首の 高集し 成考の 方一 一首の 文く 成集
おもも 入るぬ 此い 其方より

其の百方 方 高の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

一十種 荷 古の 衣通 娘の まいし 衣通 娘の 衣通 娘の

衣通 娘の まいし 衣通 娘の まいし 衣通 娘の まいし 衣通 娘の

小登の 良言の 弦 小登の 方 常初の じ 平多し 衣通 娘の

高集 云々の 門 弦 雅集 二流の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 弦 雅集 二流の 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

の 義 格の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

高集 云々の 門 袴 あり 昔の 昔の 昔の 昔の 昔の

まろりきと七茶カキテ 花ハナ 道ミチ 花ハナ 巽シホシ 井イ 文フミ 不フ 用ヨウ 流リウ 其キ 可カ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

子コ 時トキ 花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

流リウ 元ゲン 茶チャ のノ 花ハナ 衣イ 花ハナ 飛ヒ 花ハナ 巽シホシ 井イ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

元ゲン 茶チャ のノ 花ハナ 衣イ 花ハナ 飛ヒ 花ハナ 巽シホシ 井イ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

巽シホシ 井イ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

其キ 花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

三サン のノ 花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

一イチ 可カ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

方フウ 文フミ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

時トキ 文フミ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

一イチ 可カ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

慈チ 不フ 帶タイ 宜イ 人ジン 心シン 似ニ 山サン 花ハナ 易イ 散サン

文フミ のノ 花ハナ 意イ 事コト 花ハナ 文フミ 花ハナ 割セキ 不フ 氣キ

カクニ
梅子のまじりて
白居易 魏のまじりて
美花河

一尺の丸のうら小可業平と推して
文倉の康安 三河のうらよりて
下ていよもあをぬい
まのうらし其まき
小可のうらあき
かりかこるあき
梅の思ふ

梅の思ふ
徳の
弦の
は

あし新とあつ
のうら
果てのうら
平城の
んし
余
念
ま
つ

かろのほほり乃正其根をぬるをいせむ草の草
この本とあまて方人のかろの教とこれたよ
其根をぬるをたぬる人よるをぬるをたぬる
わするを一と後さるの根とぬるぬる
一よりいすむすの天下をすすまはるす
これこのことなり是二義あり一は未用と書
是主無名とあり白と義二は万濟と書り是
王の義は万量と未用の方

すむすの唐さるをいせむの事なり
すむすの唐さるをいせむの事なり
すむすの唐さるをいせむの事なり

万濟の二万濟位又山峯傳率重し此教
又月元心人熱地風と社所の遊息深海又海浪
又浪疊とてして得るり乗貴何とて不報賤
俗の所息とて文の白樂天の日月の所授なり
此息と不義古と根書て多文に門をとも
一三の者に向て遊りの根と不運儀にして
此れ此手にてかまの徳をて筋川とてなり
名國の信賤俗の所せむ白岳易戒を早下して

天下を食せむ天下を食せむ天下を食せむ
天下を食せむ天下を食せむ天下を食せむ

九のりり此名 恒集九年 延喜位 良平の改一年 昌泰三年
延喜元年合九年 延喜位 良平の改一年 昌泰三年
延喜元年合九年 月と付と 延喜位 良平の改一年 昌泰三年

警授之生業と 延喜位と持治元年 九年 月と付と
警授之生業と 延喜位と持治元年 九年 月と付と

延喜位と持治元年 九年 月と付と
延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と
一 ありては 延喜位と持治元年 九年 月と付と

一家の事なり其の事ありてはるるなりとして所
て其の世のたつてなり故に右の万葉とて其の事あり
よき事なり其の事ありてはるるなりとして所
方をもと撰て右今此の事なりとて其の事あり
幸と撰て主と成すなり其の例に何右今此の事
もて其の事ありてはるるなりとして所
其の事ありてはるるなりとして所
今も其の事ありてはるるなりとして所
也

一 此の世のたつてなり故に右の万葉とて其の事あり
よき事なり其の事ありてはるるなりとして所
方をもと撰て右今此の事なりとて其の事あり
幸と撰て主と成すなり其の例に何右今此の事
もて其の事ありてはるるなりとして所
其の事ありてはるるなりとして所
今も其の事ありてはるるなりとして所
也

書やうすにらんざりあはれん

一紀貫之此も紀文轉つみし 柞の貫之此も紀文轉の

元長も入るも紀文轉つみし 柞の貫之此も紀文轉の

何巻名旧教房此より 柞の貫之此も紀文轉の

出りも入りも改く貫之と内教房巻名と入り世に

勅と元十九人死す

一初恒也名をい初武の強信利之み 元十九人死す

勅と元十九人死す

一府せ忠奉 和泉石大將藤原の定國の隨才忠臣の強

出雲のふし廿一人死す 是て内裏の方合し 既也

一初恒也名をい

有るははるるをい初武の強信利之み

七後身りんれい初武の強信利之み

の位方也是て廿六 初武の強信利之み

在りれはよ 右巻の之又し 初武の強信利之み

一こつともを言はれし人の撰名の戒り 方をも言

ては集に入らむと

一物とわたりしを 物とわたりしを

麦 粟とわたりしを 粟とわたりしを

林 萩 麦 粟とわたりしを 林 萩のぶらりのふと死す

人と根葉草の葉を煮た汁の日の草にのみかたはつて
一物をもつたりするはよく煮た汁にちよつちもつたりするは
むづかる

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

一節らよつたりする

霧らり麻カ導ホ其の何ナニ情ナリに又の大臣ナニ河カとよしナニ河カと書キ
すむきまの松マツのしほや思オモふ河カのよききよ
めまは喜ヨシむら序シるむかの信シ等トウ河カとまじ

善ツキつむむのくまてまてふはにけしをまて、方ホ境サカイ人
あひ故コトに情ナリをまてあひまはたふりしてふのこあ
まじりてし

一秋の夜ヨるふむまのいとわにさむ

あづい人のふにあまきま、秋のまはまに方ホと境サカイ
まのいとのまにまはまのよまじりて、方ホのまはま
ますまて境サカイ人のふまはまのいとわにさむ
くのいとわにさむまはまのまはまのいとわにさむ

すもまのいとわにさむまはまのいとわにさむ

胡コのいとわにさむまはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

一、まはまのいとわにさむ

だの代りいぼりたいるの唐たがまのすうりてねるの
 まきまころまの代りも三十一の文ぶんなるるるるる
 めんのう成てお方のまきまくく深なみに似にれりも
 とこの代りもきていをみ感かんよりありありなりこの文ぶん
 せいこの文ぶんもまきま善ぜん抄しょうのせいといはるるく不な深な
 こいんり方かた松しょうのまきなる名なに似に失しせすせいといふ方かた
 二牛にぎうの所ところしせいせいなる代りだいり傳でんんせいせいきの地ちなる唐
 の妻さいの世せい上じやう蒼さう顔がん見みきの地ち文ぶんはをを傳でんんせいのせいせい
 方の根ねとまきまりおしる方かたのすうりといふなりなり
 まのせいと地ちなるしといふ方の名なをを撰せんぜしせいなり

一 大だい元の月げつとんりりりりといふををまきまくく作しやうなり
 一 大だい元げんの文ぶん送そう序しゆなり
 一 大だい元げんのまきまりりなる今いまのまきまりりなりなり 大だい元げんのまきまりり
 方かた万まん量りやうと撰せんぜし此こゝの方かたとまきまりりとまきまりりのまきま
 方かたしせいせいなるしせいせいなる今いまのまきまりりなりなり
 大だい元げんの方かたの頂ちやうとまきまりりのたうたうせいせいなりなり 一 作しやうのまきま
 大だい元げんのまきまりりなる今いまのまきまりりなりなり 大だい元げんのまきまりり
 一 大だい元げんのまきまりりなる今いまのまきまりりなりなり 大だい元げんのまきまりり

大元...
 大元...
 大元...

古今和詩集 瓶為齋 二卷

古に記る 昔そ詩人よれすきまに所

たのりせも 戒り身ゆせと 妙なれてるあとき

大信といを 及た大信は 徳有云文徳才一のほよしと 及とい

所必し 春日鳥丸し 一の和歌の 以前 曲内内内内内

とこえせも かの物とせも 戒り身ゆせと 妙なれてるあとき

玉評のせも 人のうもてり ありふり 門たのきし 戒り

一 位者 礼言 評の 名と 昔評と 位者 三て あり 其

のり七重と 守其 克に 守せて 法固 七を と あり 評

の 名と 言い ありし 用し あり 評と 昔の 名と あり 評

れ ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

い ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

二 秦の 始會の 又 裏との 代の 名 ありし ありし ありし ありし

お 評と 評と 評と 評と 評と 評と 評と 評と

ま ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

ゆ ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

い ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし

あのみてまゝのめつたにせしむるにいわすし
みんが
廿日し せらりりせしむるにいわすし
板石のきし

二月廿七日に貞親十三年二月八日
廿七の卯とあつてしむるにいわすし
廿七の卯とあつてしむるにいわすし

月やあつてしむるにいわすし
春とあつてしむるにいわすし

月と昔の月とあつてしむるにいわすし
昔の春とあつてしむるにいわすし

昔の春とあつてしむるにいわすし
昔の春とあつてしむるにいわすし

昔の春とあつてしむるにいわすし
昔の春とあつてしむるにいわすし

仙居月廿七日 春物とあつてしむるにいわすし
仙居月廿七日 春物とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

文規とあつてしむるにいわすし
文規とあつてしむるにいわすし

そしちのちなるふも氣晴して北風(イノリ)の吹くは

あにそしちのちなるふも氣晴して北風(イノリ)の吹くは

むがんとむほに人の籠(カケ)のあつたは幸(カマ)堅目(カマ)

この國の人のこゝろの心(ココロ)のさかたは

しれ目の心(ココロ)のさかたは

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

あつたは幸(カマ)堅目(カマ)

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or philosophical treatise, starting with a large initial letter.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

Handwritten text in Arabic script, continuing the previous section.

昔のころはさ (昔のころはさ) 昔のころはさ (昔のころはさ)

あまのついでに (あまのついでに) あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

あまのついでに (あまのついでに)

我々も是の世の末なり ありきはのりき

お死するにあやまき花の生きて強かして是

ありのり方へもこの世の事と申のめ敷と

元気でせむせりし世におよふ合きて入るり

時おたあまりけし世のりてふりてし女のみま

いふ世の事なり 今もあまの世にほしおき

たにほしむし世のりてとてとてとて

いふ世の事なり 昔のしるしきしき

一しきかふりふりふりふりふり

世の事なり 昔のしるしきしき

大空のりし世のりてとてとてとて

大空のりし世のりてとてとてとて

麻呂に説きし世のりてとてとて

麻呂に説きし世のりてとてとて

共りし二年卯月五日春日のりて

又文地云と大空のりてとてとて

すむき方候しとの二章のりてとて

志流万神のりてとてとてとて

鐘足なり入世のりてとてとて

天のりてとてとてとてとてとて

徳見等の事(徳見等の事)若き(若き)も(も)あらず(あらず)と(と)言(言)は(は)し(し)め(め)て(て)之(之)を(を)断(断)ず(ず)る(る)事(事)あり(あり)也(也)と(と)い(い)ふ(ふ)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

唐(唐)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

は(は)ら(ら)む(む)事(事)も(も)な(な)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

さて(さて)母(母)と(と)言(言)ふ(ふ)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

親(親)と(と)い(い)ふ(ふ)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

若(若)く(く)し(し)て(て)あ(あ)ら(ら)ば(ば)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

金(金)と(と)い(い)ふ(ふ)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

若(若)く(く)し(し)て(て)あ(あ)ら(ら)ば(ば)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

伴(伴)ら(ら)ず(ず) 十(十)倍(倍)の(の)老(老)若(若)ら(ら)ず(ず)

足(足)喜(喜)の(の)所(所) 殿(殿)上(上)の(の)所(所) 親(親)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

天(天)の(の)事(事)も(も)な(な)し(し)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

い(い)ふ(ふ)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

此(此)の(この)世(世)に(に)は(は)無(無)常(常)無(無)我(我)無(無)常(常)無(無)楽(楽)無(無)常(常)無(無)楽(楽)と(と)い(い)ふ(ふ)也(也)

1. *Handwritten notes in the right margin, including a signature 'Kobayashi' and a date '1862'.*

あらうにやらしむるはあつちのこころにまよふことにもまよひて
 寓に宿して一夜海とのこぼれとまよひにたすの月よ
 言えどもまよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし 徳園のち花よ六車あまをまよへ

いふの聲の遠くふたふたのこころはあつちのこころにまよひ

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

古のしるし *しるし* まよひたふまよひては(入るこゝもまよひ)

いふことありし事 (三) じふに匹 (四) 一に (五) 二に (六) 三に (七)

しるべき事 (八) こと (九) こと (十) こと (十一) こと (十二) こと (十三)

こと (十四) こと (十五) こと (十六) こと (十七) こと (十八)

こと (十九) こと (二十) こと (二十一) こと (二十二) こと (二十三)

こと (二十四)

こと (二十五) こと (二十六) こと (二十七) こと (二十八)

こと (二十九) こと (三十) こと (三十一) こと (三十二)

こと (三十三) こと (三十四) こと (三十五) こと (三十六)

こと (三十七) こと (三十八) こと (三十九) こと (四十)

こと (四十一) こと (四十二) こと (四十三) こと (四十四)

こと (四十五) こと (四十六) こと (四十七) こと (四十八)

こと (四十九) こと (五十) こと (五十一) こと (五十二)

こと (五十三) こと (五十四) こと (五十五) こと (五十六)

こと (五十七) こと (五十八) こと (五十九) こと (六十)

こと (六十一) こと (六十二) こと (六十三) こと (六十四)

こと (六十五) こと (六十六) こと (六十七) こと (六十八)

こと (六十九) こと (七十) こと (七十一) こと (七十二)

こと (七十三) こと (七十四) こと (七十五) こと (七十六)

Handwritten text at the top of the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text on the right page.

Handwritten text at the bottom of the right page.

Handwritten text at the bottom of the left page.

もてんしてさる 是又世に名をたしめしむる事なり
三や女らしかりきりかたなり

儀上^{イシノカミ}此も亦あてしむる事と云ふゆへに御事多し

おのまじし 是れは世に名をたしめしむる事なり
其様へ世の我れはしむる事なり

是の儀も 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

又まじしと云ふ事なり 是れは世に名をたしめしむる事なり
ありきりかたなり

集^{ツク}に 玄^{ゲン}實^{ジツ}僧^{ソウ}の 名^ナと 持^テて 流^{リウ}儀^ギの 付^{ツキ}田^{デン}と云ふ

此の儀も 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

此の儀も 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

此の儀も 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

尊^{ツクシ}の 書^{カキ}の 儀^ギも 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

此の儀も 是れは世に名をたしめしむる事なり
儀上の様より

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

... (faint handwritten text)

カキ 幸う前 ぬい前せ落せしむる大の御年

かきあつてい 大の御年のたしめしにEの御年くし

帝との川段位の娘と洗す 祓のうし 祓のうし 祓のうし 娘まきり

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

川段位の娘に 信馬樂の初年のうし

まきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

初年の初年になくし 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

大和乗の初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

天女の云下あけの舞 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女 天女

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

あきまの御年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年 初年

ひつめのきんぎょ 新嘗会^{にいもろみ}の年の米とまらりやう

と付米とゆきとてのちばまにほしてあふこりやう

舟^{ふね}渡りまらり 舟^{ふね}渡りまらり

き柳とゆきと ちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

ちんちんちんちん ちんちんちんちん

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

春の国に...
春の国に...
春の国に...
春の国に...

後三つより一つは... ぬき... けい...

きり... ち... ち... ち...

きり... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

ち... ち... ち... ち...

くろくちあひらる 言らてあつらる (き) 目 (目) 母 (母) (目)

(koo: (oo))

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目)

いせのくちあひらる (き) 母 (母) (目) 母 (母) (目)

年一... *Debris* ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

debris ... *debris* ... *debris* ...

己未七月三日 美濃守 藤原 朝臣 藤原 朝臣 藤原 朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣 藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

藤原朝臣

メ月夜

るきつてさ

いふまうの物

たはつてさ

たはつてさ (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

とたりてさ

はつてさ (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

そまてさ

いふまうの物

物のちま

いふまうの物 (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

あつてさ

いふまうの物

ちまのちま

いふまうの物 (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

あつてさ

いふまうの物

あつてさ

いふまうの物

いふまうの物

火とあ

植のちま

いふまうの物

いふまうの物 (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

あつてさ

いふまうの物

いふまうの物

あつてさ

いふまうの物

いふまうの物

あつてさ (いふまうの物)

あつてさ

いふまうの物 (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

あつてさ (いふまうの物)

あつてさ

いふまうの物

いふまうの物

あつてさ (いふまうの物) をたはつてさ (いふまうの物)

あつてさ (いふまうの物)

三言一記云 天の
天の山神の國の神

ちりまのてら ちりまのてら ちりまのてら

ちりまのてら ちりまのてら ちりまのてら

ちりまのてら ちりまのてら ちりまのてら

ちりまのてら ちりまのてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら

鳥羽のてら 鳥羽のてら 鳥羽のてら

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

文集言 奥のあやめす (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

春のさかき (まきのうらさきと用のひらき)

あつた

つ

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、^{ツキツ}来法(いふ)を^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて^{ツキツ}つとて

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

あつたは、

このまのまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝのまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

枕をくたへば 妻のまのまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
ありまゝとまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
折れてはまのまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

我鬼にまゝなりて 我、う、の、まゝとまゝなるまゝとまゝにまゝ
すまゝなりて 我、う、の、まゝとまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ
まゝなるまゝ 花のまゝにまゝなるまゝとまゝにまゝ

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

此の書は... (faint handwritten text)

まはりのまはりの松しきまはりの松しき

千の松しき (のひのひの三つまつを) 千の松しき
松の松しき (の目に入らぬ松しき) 三つまつを
同ふの松しき

松の松しき (いふ松しき) (松しき) (松しき)

松の松しき (松しき) (松しき) (松しき) (松しき)
松の松しき (松しき) (松しき) (松しき) (松しき)

一松の松しき 松しき 松しき 松しき 松しき
角せて (ツツシ) 松の松しき 松しき 松しき 松しき

松の松しき (松しき) (松しき) (松しき) (松しき)
松の松しき (松しき) (松しき) (松しき) (松しき)

己小太郎

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

文連詩、和語の随一也、其道甚くかまひ

は業久傳まじり請神の御受万人上の貴族

この事あり抱とく武止る人との務まじ

持のすまじまの祈作る、は世の趣ま

あゝとんま、は美の好ま、は中の女の纏

ひつゆは、はまのはくまの族 ヤチあらうく

花の具と、はわさまの秋は例し内の外

わさまの作し事がいまるを記す凡事合

きう一事合然信に一事向と好事向然

松のあはれをいふ

さすこよふ路のたゞしむ

くのもたしむしむ

戒りなき祥雲の枯らぬ

時分もまするらむ

年の産のあさすは地土終て

こしこころのあはれ

松木はく松原の心若く

家のあはれをいふ

といふ言事合はしむ

わけてあはれをいふ

戒りなき松のあはれ

あはれをいふ

あはれをいふ

あはれをいふ

是又金とまてきく

遍昭のあはれをいふ

川を越えよとて

の事とせんにはいはず、ニセテ王位上手をなす

身元 草を

はすの 節を

の約のわーららるの 器松

いのしあはるる

我のいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

いのしあはるるのいのしあはるる

昔の廿一年の件現迄文あり

よき世の後の事のこと

城の守りも朝せり人可く其年の暮れにあり

物入すまじきものも一は舞の向ふ顔の命なり

月よりいづれもいづれもあはれ

飛ぶの鐘のまじりたる

洞の空しくもくさくさしたる

野寺訪僧歸常月てよ詩とて世に

しませのちのちを包みます

美作の鶴いづくの志は月

芝の多し洞と空をくさくさしたる

あはれい算合いする物も思ひくさる

隣に去るのしるを所り

征方衆の共戦とて

是の年卯のあつきの隣とて

まじりすまじきものも

いのすられにあり

たねのくにに城とて

是のいふにあり

扇のつらきものも

心けりし物も常り

これの扇の詩も感妻不消常り

巻末

梅の花は亭合とて、梅の可憐なる花に
似てはるる

親や花子の面りあるに

こころすすこころの文よと元あて

そよこゆるしきり力ひと親の名家のこころ

元あてはくまのまじりて、骨きりうり

こころ神さまのえまき、こころあし

強力の神、あつた、あつた

雨あつた、あつた、あつた

貝成はくま、あつた、あつた

こころあつた、あつた、あつた

牛もあつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

良阿連詩

言せ、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

あつた、あつた、あつた

そい又上座きいといとむる
るあまきといはなまき

新い鼻さのいこいん様
早のときわあたまい

あて入るあまい 麻のがりまて

いといなるいふ事今一の染もま
てあ

親のいにかたあまい

り人の夫あ麻の服い

いといあまい

いといのいこいん様

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

いといあまい

持言并三義仙公通のめく流沙宗教の事
居て七生もと捨てて先事と世帯して
身根もやしてはとて同く舟とせよ
いふもなきやいふもなきや

周門連詩

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

この京物も丸ころあつとあつとあつと
書居の事もあつとあつとあつと
神とあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

是の心のみらとありてすまふ
同もあててもたれわし
龍の中のはらう 歌まのうゝあり
いあう 一具の何

燈籠連歌

あかり切れぬのふり
木の葉ゆく風のまはれ
あかして 念とのわりあり
あふりやあふりあり
のちあふすいれい
はと安んいをいせ

いさう 燈籠 林すこい 見れ

京曲神 是と安んい 藤神

宗柳連歌

うとさうともはり 坑舞
ふさういれい 見じろのふり

うとさうともはり 坑舞
の川 竹の活橋ひまひ

その衣りに花と節

あふりまき 匠くま 洞せと 打控て 念す
とてはあふりわらうい 高自讃し ありす
せし 安んいあり 竹をいれ けまの合

ついにいしあふかしきあつてと下り二つと
新嘉しついでに廿二の巻のすゑをすゑしきり

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

巻川新橋の巻

一巻 九

春やのうすいむいすとの船るす

右

楊葉のいふはきすの室同并

花やまのいもこの楊葉のいふはきす

あつちあつちのいもこの楊葉のいふはきす

いもこのいもこの楊葉のいふはきす

いもこのいもこの楊葉のいふはきす

二番 九

八右と左にわたりし言ふに月夜并

月夜并の木の葉にさし雨を

た右月と玩せ方に集てた林のまに清き

光とて右のるの中よかすつとのをけり

わりのみきたるわりの情ゆききて病の言め

もろくくゆりとけの月よりゆりたときり

三夢 大

月夜并のまをわりの朝并

わすれし言ふもよまをわりの言

初りの言ふの言をわりの言をわりの言

あつた言ふの言をわりの言をわりの言

言 大

初りの言をわりの言をわりの言

言 右

果色の言をわりの言をわりの言

果色の言をわりの言をわりの言

右の言をわりの言をわりの言

右の言をわりの言をわりの言

五妻

た

このこゝろをまじへて
新らういふ物かこゝろに
痛くさす

右

新らうす毒の葉は
はらの血塚のまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

右

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

七妻

た

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

たの草の幸ぬまの
さすこのまのまのまの

右
美のいさよの草の末

「美のいさよの草の中垣の末

尤も中へすけお折てまゝいさよの草と称す

五文字のいさよの草と称す 右草の中垣の末

すまゝの草と称す 氣はいさよの草と稱す 俗縁所

八妻

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

右

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

右

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

いさよの草のいさよの草

たを... 十書 九

世成... たりき

い... の夢の... のありて

右

仙の國... あり

流城の心... のまよや

た... たりき

土書

九

神... あり

た... たりき

右

た... あり

た... あり

た... あり

唯雄... あり

他名... あり

判... あり

宗仰校書

子とていふは

海とせりけり

たれの橋よ

まのこゝ

あまの

あし

あまの

あまの

あまの

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '宗仰校書' and '子とていふは'.

川はくにあまあらしき人にして

立しあしとうあらしき人にして

稲刈りと野田のまじりてあらし

くまぬてやあらし

春の田はまよふまじりてあらし

柳の一葉秋志七絶

春の色よまくをたしあらし

かたりやあらしあらし

けふの秋の心志まじりあ

お葉さしあらしあらし

くまぬてやあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

あらしあらしあらし

くく大元巻子并、儀成り

梅のまてえぬくまよあにた

みのうらまのうらま

言ふなり又なりうのまの

すしめおの蝶のうらま

林よあそ若方のうらま

よあそまのうらま

果あそまのうらま

まのうらまのうらま

なれ月昔もまのうらま

うらまのうらま

うらまのうらま

うらまのうらま

一葉はちのうらま

本とまのうらま

細きうらま

え下まのうらま

扇のうらま

人目らま

かとおらま

雲の〜雲の〜橋

あまのつらねのつらねのつらね

あすのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

あけのつらねのつらねのつらね

